

## 研究ノート Research Note

# インド・ウッタラーカンド州におけるセンサス・タウンの増加と空間特性

陳 林\*・勝又悠太郎\*\*・蘇冠東\*\*

**要旨：**近年、インドの都市化におけるセンサス・タウンの重要性が高まっている。本稿は国土周辺部に位置しながらも、デリー首都圏の経済成長の影響を受けているウッタラーカンド州を取り上げ、当州における都市化の進展がセンサス・タウンの成立に果たす役割を明らかにすることを目的とする。当州は、インドの本格的な経済自由化が始まった1991年以前までは緩慢な都市化を経験してきたが、それ以降は都市化が加速している。都市化の進展に伴い、センサス・タウンの増加がみられる。都市人口が急増したのは主に平原地域の3県とナイニータル県であり、都市人口の比率もこの4県で高い。一方、山岳地域の諸県は、近年都市人口の増加がみられるものの、都市人口の比率は依然低い。

当州におけるセンサス・タウンの増加の程度には、地域ごとのばらつきが大きい。平原地域の諸県では、センサス・タウン人口が急増する一方で、山岳地域の諸県ではその増加は少ない。また、当州のセンサス・タウンの多くは平原地域の3県およびナイニータル県に分散的に立地している。そのため、その成立には州都や1級都市への近接性よりも、郡の中心都市、鉄道駅へのアクセスがより重要な要因になっていることが明らかとなった。

**キーワード：**センサス・タウン、都市化、空間特性、地域格差、ウッタラーカンド、インド

## I はじめに

インドは1991年の経済自由化以降、先進国からの資本を導入しながら急速な経済成長を遂げている。その中で、経済成長を牽引しているのが、大都市や大都市圏を核としたより広域の経済集積地域、いわゆるメガ・リージョンである(岡橋, 2012)。そのため、インドでは全体的に緩慢な都市化の特徴を有する一方で、速いスピードで巨大都市が形成されている(日野・宇根, 2015)。また、大都市郊外の開発による都市機能の分散は、大都市圏への機能のさらなる集中をもたらすとともに、人口集中に拍車をかけている(由井, 2003)。

インドには2種類の都市地域が存在している。1つは法的な都市地域(Statutory towns (STs))であり、州の市政機関(a municipality, corporation, cantonment board or notified town area committee, etc.)が置かれている地域である(佐藤, 2015)。いま1つはセンサス・タウンであり、行政上は村委員会が管理している村であるが、人口規模および社会経済的特性が都市の条件を備えている。センサス・タウンの要件は下記の3つの指標を全て満たすことと定義されている。(1)

人口規模が5,000人以上、(2)1km<sup>2</sup>あたり人口密度が400人以上、(3)男性長期非農業有業者の比率が75%以上であることである。そのため、本稿でいう都市化の進展は、上記の2種類の都市地域における人口の増加を指している。

インドの都市化に関する研究はこれまで大都市を対象とするものが多かった。それは新経済地理学の流行と密接に関係している。すなわち、大都市は一国の経済成長のエンジンであり、グローバル経済への接合が最も進んだ地域であることから、研究者や政府側に注目されてきたためである。一方、近年中小都市に関する研究がインドだけでなく、中国およびその他のアジア諸国、ラテンアメリカを対象に広く進んでいる(Berdegú et al., 2015; Christiaensen and Todo, 2014; Zhu, 2000, 2002)。中小都市の研究が新たに加わった理由の1つは、一国の都市機能と都市形態はメガシティのみで構成されるのではなく、中小都市も含めた多様なものから考察することが重要と考えられていることにある(Bell and Jayne, 2009)。

インドの小都市に関する研究で近年注目されている概念がサブアルタンアーバニゼーション(subaltern

\* 広島大学現代インド研究センター/人間文化研究機構

\*\* 広島大学大学院文学研究科・院

urbanization) である (Denis and Zerah, 2017)。サバルタンアーバンゼーションは、インドの国勢調査で都市と定義されるかどうかにかかわらず、大都市から独立しており、ローカルおよびグローバルに他の集落との対話を通じて、自律的に集落の成長を遂げている現象を指している (Denis et al., 2012)。そして、大都市だけでなく、小都市も経済成長、社会変動およびイノベーションに多大な役割を果たしていると考えられる。インドの小都市は基本的に人口 10 万人以下の都市を指し、関連研究は主に以下の 2 つの視角から進められている。1 つは、小都市をいかにインドの都市システムに位置付けるかという研究である。例えば、センサス・タウンと既存の都市地域との関係を論じた Pradhan (2013) は、インドにおけるセンサス・タウンの 37.2% は 1 級都市<sup>1)</sup> に隣接していること、2001 ~ 2011 年の都市人口の増加の 29.5% に貢献したこと、さらにセンサス・タウンの数および都市人口増加への寄与率は州間に大きな格差が存在することを明らかにした。一方、1960 年代以降のインドの都市システムのダイナミクスにおける小都市<sup>2)</sup> の役割を検討した Chauhuri et al. (2017) と Swerts (2017) によると、小都市はインドの都市人口の 30% を占めるが、100 万人以上都市に必ずしも近接していないことが明らかになった。以上の研究から、インドの都市化は巨大都市形成を特徴とするが、小都市も都市システムの重要な構成要素として都市化の一翼を担っていることが確認される。

小都市に関するもう 1 つの研究は特定の州に注目し、センサス・タウンの分布や大都市との関係の究明に取り組んだものである。特に、デリー首都圏および近隣地域のセンサス・タウンに関する研究が進められている。例えば、宇佐美・岡本 (2015) は、デリー首都圏におけるセンサス・タウンの急増を報告した。その上で、センサス・タウンは行政的には村に分類され、都市的インフラやアメニティが整備されていないことから、この現象を「安上り都市化・人口収容」と指摘した。また、センサス・タウンの急増は、大都市の拡大が法定都市への人口集中だけでなく、周辺農村への産業の分散化や住宅開発のプロセスを伴っていることを示唆した。一方、ハリヤーナー州とラージャスターン州におけるセンサス・タウンの分布特性を考察した Punia et al. (2017) は、センサス・タウンの成立には大都市圏との近接性が重要であることを指摘した。他方、Denis and Ahmad (2017) は、タミル・ナドゥ州の港町であるパラングベッタイを対象に、小都市は近隣の大都市に支配されることなく、グローバルに

移民社会に直接アクセスしていることを明らかにした。

上記したインドの小都市に関する先行研究から、センサス・タウンと大都市圏との近接性の関係およびセンサス・タウンの分布は州によって大きく異なることが理解できる。このような地域差はいかなる理由で発生したのであろうか。この問題に答えるためには、センサス・タウンの成立にはいかなる要素が重要な因子として作用しているかを検討する必要がある。また、センサス・タウンは労働市場との関連からすれば、農外雇用機会が増加している場所と理解されている。この点に着目すると、州内経済格差の大きい州を取り上げ、経済発展の地域的差異とセンサス・タウンの変化を考察することで、上記の課題にアプローチすることが可能であろう。

以上を踏まえて、本稿は州内の経済格差が激しい山岳州の 1 つであるウッタラーカンド州を取り上げ、都市化の進展がセンサス・タウンの成立においていかなる役割を果たしているのかを考察することを目的とする。当州はインドの周辺部に位置しながらも、近年デリー首都圏の経済成長による影響を受けている。州全体としては経済的後進性を有しながらも、平原地域では急速な都市化が進み、ヒマラヤ山岳地域との間に大きな経済格差を示す。当州は 2000 年にウツタル・プラデーシュ州から独立し、中央政府の産業誘致に依拠した大規模な工業化が進行したため、州内の地域格差のさらなる拡大が今後見込まれる (岡橋ほか, 2011)。

本稿の構成は以下の通りである。第 II 章は使用するデータを説明した後、対象地域であるウッタラーカンド州の概観を述べる。第 III 章は当州における都市化の現状およびセンサス・タウンの増加の状況を考察する。第 IV 章は当州の都市化の進展がセンサス・タウンの成立に果たす役割およびその立地特性を分析する。第 V 章では本稿の研究成果をまとめるとともに今後の課題に言及する。

## II データと対象地域の概観

### 1 使用するデータ

本稿で使用するデータは次の 2 つである。1 つは、広島大学現代インド研究センターがインドの ML Informap 社から購入した地理情報データである。このデータには県 (District)、郡 (Sub-district) および小地域 (Village, Town など) の情報が含まれている。また、インドのセンサスコードも含まれているため、統計データとの接合も可能である。当該データはインド国内外の行政機関や大学などで利用されており、信頼性の高いデータといえる。本稿はこのデータを使用

し、行政上の都市地域およびセンサス・タウンを抽出する。

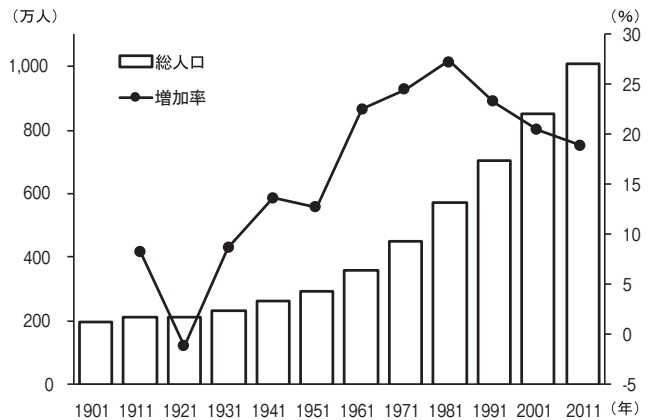
いま1つはインドセンサスデータの「タウン」および「ビレッジ」に関する集計データである。そのうち、本稿では主に Town Directory のデータを使用した。このデータには地域の人口に関する指標だけでなく、都市の区分、アメニティの状況、都市地域の変遷などの情報が含まれている。本稿はこのデータに基づき、ウッタラーカンド州の都市化の現状およびセンサス・タウンの成立に及ぼしている影響を検討する。

## 2 ウッタラーカンド州の概観

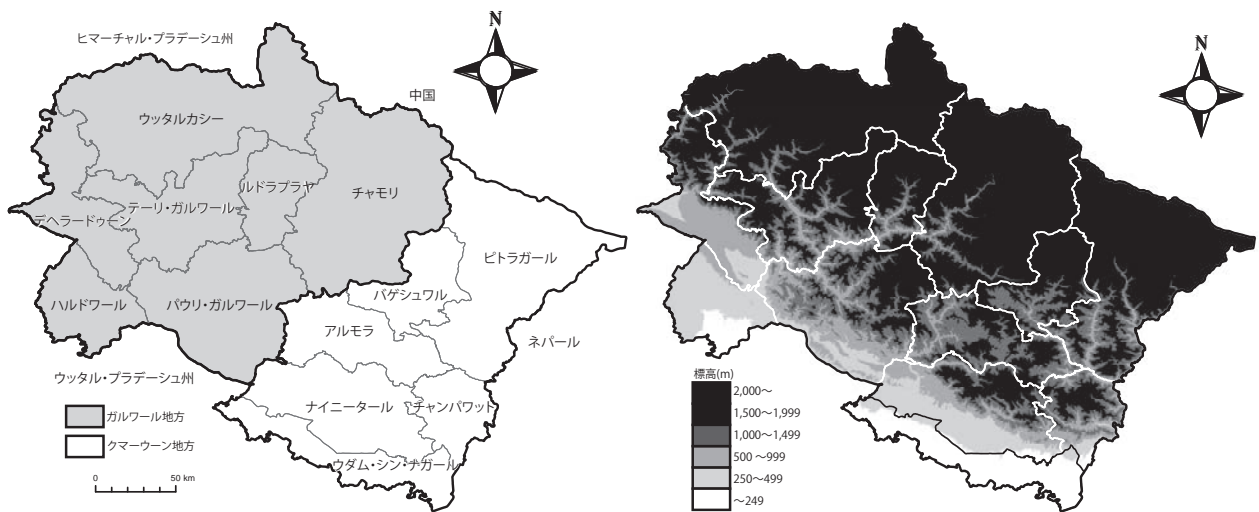
ウッタラーカンド州はインド北部の国境地域に位置する山岳州の1つである(第1図)。面積は53,566km<sup>2</sup>で、2011年の人口は1,008.6万人であった。2000年に州として独立するまでは南に隣接しているウッタール・プラデーシュ州の一部であった。当州は歴史的・文化的に異なる2つの地域から構成され、州の東半分はクマーウン地方、西半分はガルワール地方となっている(宇根・岡橋, 2014)。ガルワール地方のデヘラードゥーン県に州都が置かれ、クマーウン地方のナイニータール県には州の高等裁判所が設けられた。なお、ナイニータール県はヒマラヤ地域有数の観光地でもある。ガルワール地方は、ウッタールカシー県、デヘラードゥーン県、テーリ・ガルワール県、ルドラブラヤ県、チャモリ県、ハルドワール県、パウリ・ガルワール県の7つから構成されている。一方、クマーウン地方は、ピトラガール県、バゲシュワール県、アルモラ県、ナイニータール県、チャンパワット県、ウダム・シン・ナガール県の6県からなる。次に、地形の特徴から上記13県を大別すると、デヘラードゥー

ン県、ハルドワール県、ウダム・シン・ナガール県の3県は平野・丘陵部が広がる平原地域と呼ぶことができる。他の10県は基本的に山岳地域に位置づけられる。

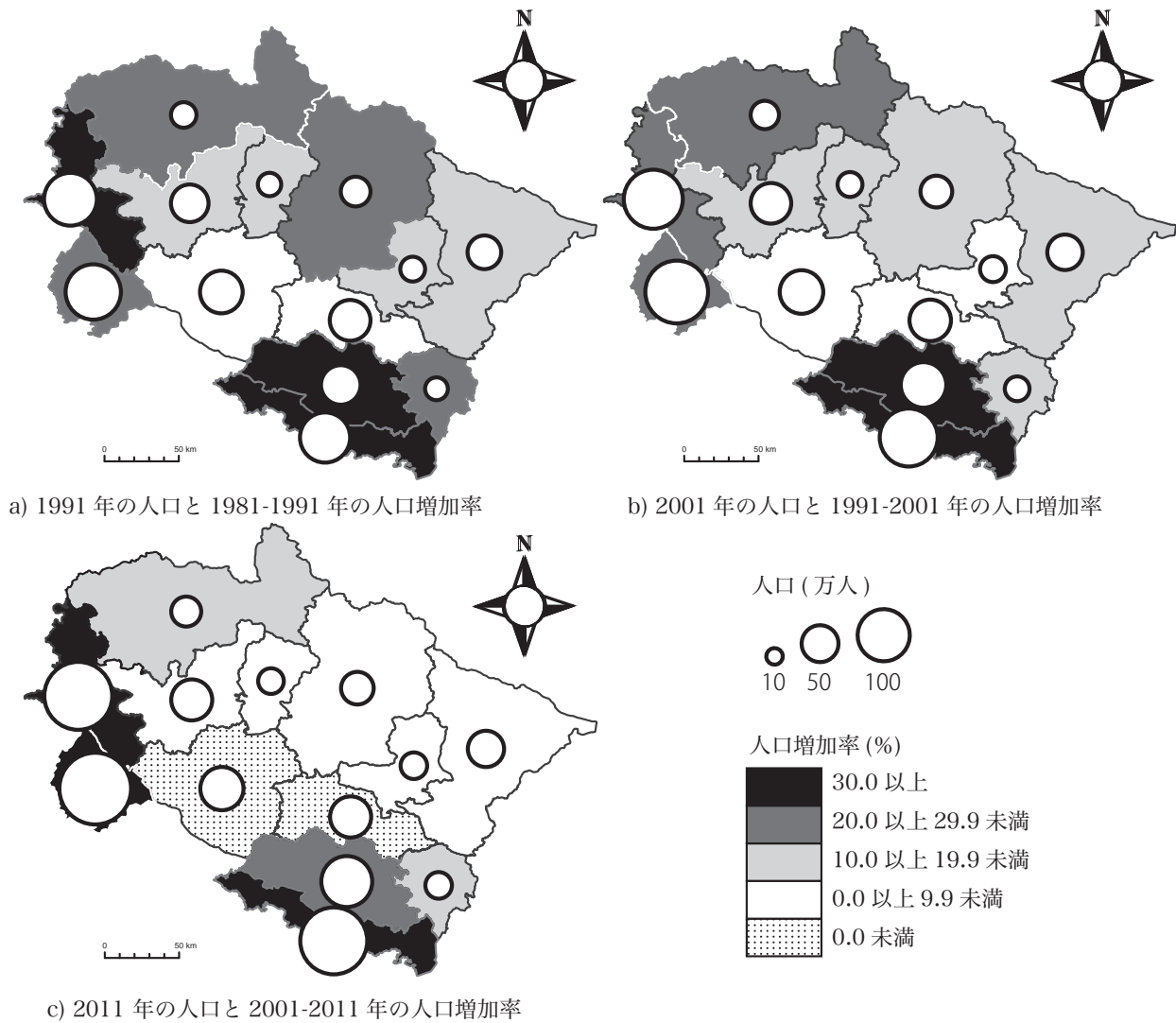
当州の人口は1901年時点で198万人であったが、特に1961年以降人口の急増が認められる(第2図)。増加率をみると、1961～71年は24.4%、1971～81年は27.4%、1981～91年は23.1%、1991～2001年は20.4%であり、2001～2011年はやや低下したものの18.8%であった。1961年以前の増加率と比べると、1961年以降の増加率は高い水準にあることが読み取れる。次に、1991年以降の県別の人口増加率をみると(第3図)、平原地域にあるデヘラードゥーン県、ウダム・シン・ナガール県、ハルドワール県の3県、およびナイニータール県はいずれの時期においても高い増加率を示している。一方、アルモラ県とパウリ・ガルワール県は人口増加が停滞しており、2001～



第2図 ウッタラーカンド州の人口推移  
資料：Census of India 2011 により作成。



第1図 研究対象地域



第3図 県別にみた人口の増減

資料：Census of India 2011により作成。

2011年には人口減少に転じている。

ウッタラーカンド州は、2000年以降、インドの中央政府による産業政策の対象となり、急速な工業開発が進んでいる。当州の工業開発は、シワリク丘陵の山麓部（ウダム・シン・ナガール県）に帯状にインダストリアル・ベルトが形成されている（友澤，2008）。また、こうした経済発展の恩恵を受けられるのは当州の平原地域に限られている。そのため、近年の工業化によって、平原地域と山岳地域の経済格差が拡大している。

### Ⅲ ウッタラーカンド州の都市化とセンサス・タウンの増加

#### 1 都市人口の推移

第1表は、1901年から2011年までの都市人口と都市数の推移を示したものである。これによると、1901

年時点では都市人口はわずか15.4万人であり、総人口の7.8%を占めるにすぎなかった。また、1910年代から20年代にかけて都市人口増加率の上昇は10%以下の低いレベルにとどまっていた。都市人口の増加は総じて1931年まで緩慢であった。都市人口が急増したのは1931年以降であり、1951～61年の10年間を除くといずれも30%以上の増加を遂げた。これにより、州の都市人口比率も大きく上昇した。都市人口比率は1941年の10.3%から、1991年の22.4%を経て、2011年には30.0%までに達した。都市人口の増加に対応して、都市数も増加した。都市数は1901年の20から、1971年の40、2001年の87と推移し、2011年には116まで増加した。一方、センサス・タウンは1991年には3タウンであったが、2011年には41タウンとなった。

次に、都市類型に基づきウッタラーカンド州におけ

る都市数の増加の特徴を考察する（第2表）。当州の都市は主に下記の6つに分類されている。Municipal Corporation (M Corp.) は一般的に100万人以上の地方自治体を意味しているが、当州では州都のデヘラードゥーンのみが該当する。Cantonment Board (CB) はインドの国防管轄下にある市民行政機関であり、主にデヘラードゥーン県、テーリ・ガリワール県、アルモラ県、ナイニータール県、ハルドワール県の都市が該当する。Nagar Panchayat (N.P) は、一般的に農村部から都市部へ移行する際の居住区であり、人口11,000以上25,000人未満の都市部を指している。一方、Nagar Palika Parishad (N.P.P) は一般的には人口

第2表 都市類型別の都市数

都市類型	都市数		
	1991	2001	2011
Municipal Corporation	1	1	1
Industrial Township	2	2	2
Cantonment Board	9	9	9
Nagar Panchayat	29	31	31
Nagar Palika Parishad	32	32	32
Census Town	3	12	41

資料：Census of India 2011 により作成。

第1表 ウッタラーカンド州における都市人口の変動

年	都市人口 (人)	都市人口 の比率 (%)	増加数 (人)	増加率 (%)	都市数	CT数
1901	154,473	7.8			20	0
1911	181,241	8.5	26,768	17.3	20	0
1921	195,277	9.2	14,036	7.7	23	0
1931	195,797	8.5	520	0.3	25	0
1941	270,423	10.3	74,626	38.1	25	0
1951	398,296	13.5	127,873	47.3	34	0
1961	494,966	13.7	96,670	24.3	32	1
1971	734,276	16.3	239,310	48.3	40	1
1981	1,061,821	18.5	327,545	44.6	65	1
1991	1,579,295	22.4	517,474	48.7	76	3
2001	2,184,849	25.7	605,554	38.3	87	12
2011	3,026,203	30.0	841,354	38.5	116	41

注：CTはセンサス・タウンを指す。

資料：Census of India 2011 により作成。

10万人以上の都市部を示している。Industrial Township (I.T.S) は工業都市であり、当州のデヘラードゥーン県とハルドワール県に1つずつある。以上の都市部が法制化された都市である。1991年～2011年の当州の都市類型別都市数の変化をみると、法制化された都市のなかで、N.Pだけが29から31に増加しているが、他の法制都市の増加はみられない。それに対して、センサス・タウンは1991年の3タウンから、2001年には12タウンに増え、2011年には41タウンまでに達した。このように、ウッタラーカンド州における都市化の進展は、センサス・タウンの増加をもたらしているといえる。

## 2 都市人口の地域変動

第3表は、1991年～2011年のウッタラーカンド州における県別の都市人口、同比率、都市数などを示している。これによると、1991年に都市人口が最も多かったのはデヘラードゥーン県の47.1万人であった。

第3表 県別にみた都市人口の変動

県名	都市人口(人)			都市人口の比率(%)			増加数(人)		増加率(%)		都市数		
	1991	2001	2011	1991	2001	2011	1991-2001	2001-2011	1991-2001	2001-2011	1991	2001	2011
ウッタールカシー	17,261	22,918	24,305	7.2	7.8	7.4	5,657	1,387	32.8	6.1	3	3	3
チャモリ	38,697	50,703	59,396	11.9	13.7	15.2	12,006	8,693	31.0	17.1	6	6	6
ルドラブラヤ	1,843	2,732	9,925	0.9	1.2	4.1	889	7,193	48.2	263.3	2	2	2
テーリ・ガルワール	32,887	60,440	70,139	6.3	10.0	11.3	27,553	9,699	83.8	16.0	5	7	7
デヘラードゥーン	471,765	689,831	936,679	46.0	53.8	55.2	218,066	246,848	46.2	35.8	12	15	22
パウリ・ガルワール	70,116	89,875	108,527	10.5	12.9	15.8	19,759	18,652	28.2	20.8	5	7	9
ハルドワール	348,142	444,106	693,094	31.0	30.7	36.7	95,964	248,988	27.6	56.1	8	10	24
ピトラガール	35,697	56,094	69,605	8.6	12.1	14.4	20,397	13,511	57.1	24.1	3	3	3
バゲシュワール	5,772	7,803	9,079	2.6	3.2	3.5	2,031	1,276	35.2	16.4	1	1	1
アルモラ	47,735	54,505	62,314	7.8	8.6	10.0	6,770	7,809	14.2	14.3	4	4	5
チャンパワット	26,098	33,778	38,343	13.7	15.0	14.8	7,680	4,565	29.4	13.5	4	4	4
ナイニータール	190,989	269,050	371,734	33.2	35.3	38.9	78,061	102,684	40.9	38.2	8	8	11
ウダム・シン・ナガール	292,293	403,014	573,063	31.6	32.6	34.8	110,721	170,049	37.9	42.2	15	17	19

資料：Census of India 2011 により作成。

次いで、ハルドワール県、ウダム・シン・ナガール県、ナイニータール県の都市人口が多く、それぞれ34.8万人、29.2万人、19.9万人であった。都市人口比率も上記の4県で高く、いずれも30%を超えていた。その中で、最も高かったのはデヘラードゥーン県であり、当県の全人口の46.0%を占めた。上記4県以外の県は都市人口比率が15%以下と低く、特に、ルドラプラヤ県とバゲシュワール県の都市人口はそれぞれ1,843人と5,772人しかなく、都市人口比率も0.9%と2.6%と極めて低かった。

2001年になると、全ての県で都市人口の増加が観察された。増加数はデヘラードゥーン県の21.8万人が突出し、最も少ないのはルドラプラヤ県の889人であった。また、デヘラードゥーン県に次いで増加が著しかったのは平原地域にあるハルドワール県とウダム・シン・ナガール県、およびナイニータール県であり、それぞれ9.5万人、11.0万人、7.8万人の増加がみられた。このように、都市人口の増加は1991年に都市人口比率の高かった4県を中心に進んだ。これにより、都市人口比率が30%以上の県は依然上記の4県となり、最も高かったデヘラードゥーン県の同比率は53.8%であった。そのほかの県でも都市人口比率の上昇がみられたが、デヘラードゥーン県とナイニータール県を中心とし、そこから周辺部に行くほどその増加の度合いが小さくなるという特徴が認められる。

2011年の都市人口の増加も依然平原地域のデヘラードゥーン県、ハルドワール県、ウダム・シン・ナガール県の3県、およびナイニータール県が中心であ

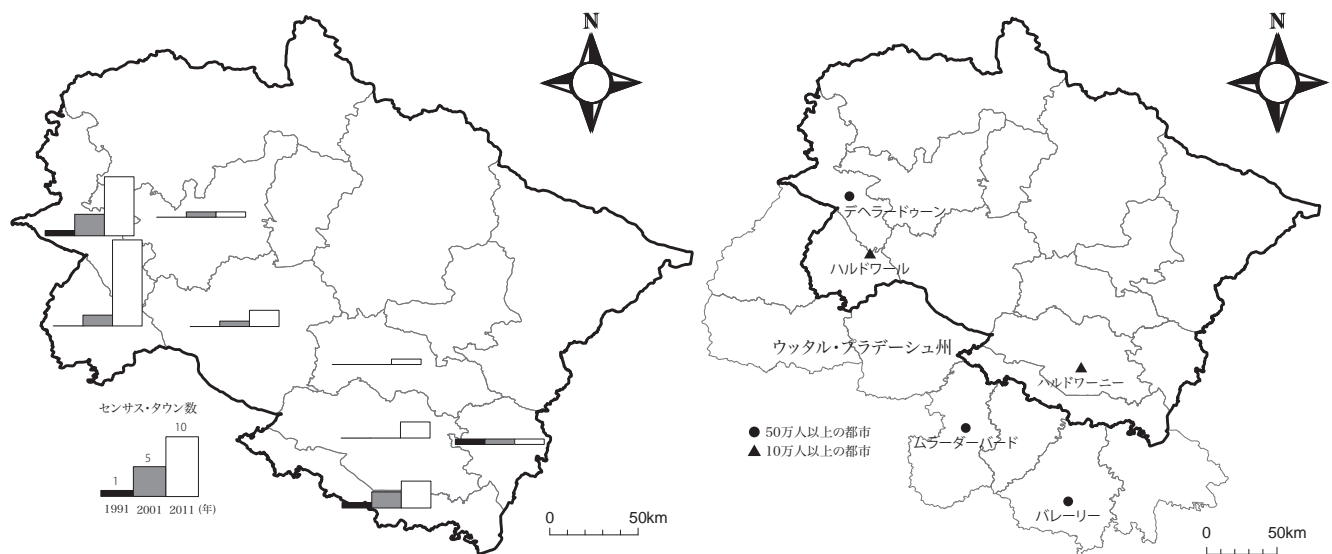
る。最も多く増加したのはハルドワール県の24.8万人であった。これらの4県における都市人口の増加数の合計は76.8万人にのぼり、当州全体の増加数の91%を占めた。これにより、上記4県の都市人口比率はさらに上昇し、デヘラードゥーン県の同比率は55.2%となった。

以上のように、ウッタラーカンド州では都市人口の増加が平原地域の3県およびナイニータール県を中心にみられた。一方、その他の県はこれら4県と比べると、都市人口の増加数が小さく、平原部と山岳部における都市化水準の地域的格差が拡大した。

### 3 センサス・タウンの増加とその分布

ウッタラーカンド州では、1991年以降センサス・タウンが急増している。第4図はセンサス・タウンの増加の地域的特性を示したものである。これによると、1991年にはセンサス・タウンは3つのみで、デヘラードゥーン県、チャンパワット県、ウダム・シン・ナガール県に分かれて分布していた。

2001年になると、センサス・タウンの数は12に増えた。センサス・タウンを有する県は1991年の3県のほか、テーリ・ガルワール県、パウリ・ガリワール県、ハルドワール県の3県が新たに加わった。一方、複数のセンサス・タウンを有する県は3つであり、州都が立地するデヘラードゥーン県と平原地域の県である。これら3県のセンサス・タウンは合計9つを数え、2001年の当州のセンサス・タウンの多数を占めている。



第4図 ウッタラーカンド州におけるセンサス・タウンおよび近隣主要都市  
資料: Census of India 2011 により作成。

2011年にはセンサス・タウンは41にまで増加した。センサス・タウンを有する県も2001年の6から8へと拡大し、アルモラ県とナイニータール県が新たに加わった。複数のセンサス・タウンを有するのは、デヘラードゥーン県、パウリ・ガルワール県、ハルドワール県、ウダム・シン・ナガール県、ナイニータール県である。上記5県のセンサス・タウンの合計は38となり、州全体の93%を占めた。中でも、ハルドワール県とデヘラードゥーン県の増加が激しく、2001年からそれぞれ14と7の増加がみられた。

このように、1991年以降のウッタラーカンド州におけるセンサス・タウンの増加には地域間のばらつきが大きい。その中で、センサス・タウンの増加が著しいのは州都付近と都市化の進んでいる平原地域、特にガルワール地方の平原地域に集中する傾向が窺えた。

#### IV 都市化の進展とセンサス・タウンの成立

##### 1 都市人口に占めるセンサス・タウン人口の比率

Ⅲではウッタラーカンド州におけるセンサス・タウンの増加とその地域的特徴を検討した。本章では、都市化の進展に伴うセンサス・タウン人口の増加プロセスを分析する。第4表は、1991年から2011年の県別ごとの都市人口に占めるセンサス・タウン人口の比率を示したものである。これによると、1991年時点では当州のセンサス・タウン人口は4.7万人であり、都市人口の3%にしかすぎなかった。センサス・タウンの所在していた3県をみると、ウダム・シン・ナガール県とデヘラードゥーン県の都市人口に占めるセンサ

ス・タウンの人口はそれぞれ7.6%と3.9%であった。一方、都市人口の少なかったチャンパワット県は25.2%と高かった。

2001年になると、センサス・タウン人口は13.7万人へと増加し、州の都市人口に占める比率も6.3%へと上昇した。センサス・タウン人口が最も多かったのはデヘラードゥーン県の4.8万人であり、同じく平原地域にあるウダム・シン・ナガール県の3.6万人とハルドワール県の2.3万人と続く。上記3県の都市人口に占めるセンサス・タウン人口はそれぞれ7.0%、8.9%、5.4%であった。一方、都市人口の少ないチャンパワット県、テーリ・ガルワール県、パウリ・ガルワール県をみると、都市人口に占める比率はそれぞれ24.2%、18.9%、10.1%と高い。

2011年にはセンサス・タウン人口は48.8万人へと大きく増加し、州全体の都市人口の16.2%を占めるまでに至った。県別にみると、センサス・タウン人口の増加が最も著しかったのはハルドワール県の17.7万人である。この増加により、当県の都市人口に占めるセンサス・タウン人口の比率も25.6%に上がり、山岳部の県に匹敵するレベルに達した。これに次いで大きかったのは同じく平原地域にあるデヘラードゥーン県であり、9.3万人の増加をみた。都市人口に占める比率は2001年の7.0%から15.1%へと大きく上昇した。続いてセンサス・タウン人口の増加が多かったのはナイニータール県とウダム・シン・ナガール県である。都市人口に占める比率はそれぞれ11.7%と12.2%である。一方、山岳部のテーリ・ガリワール県、

第4表 県別にみた都市人口とセンサス・タウン人口

県名	都市人口(人)			センサス・タウン人口(人)		
	1991	2001	2011	1991	2001	2011
ウツタルカシー	17,261	22,918	24,305	0	0	0
チャモリ	38,697	50,703	59,396	0	0	0
ルドラプラヤ	1,843	2,732	9,925	0	0	0
テーリ・ガルワール	32,887	60,440	70,139	0	11,444	18,016
デヘラードゥーン	471,765	689,831	936,679	18,532	48,511	141,557
パウリ・ガルワール	70,116	89,875	108,527	0	9,033	25,308
ハルドワール	348,142	444,106	693,094	0	23,984	177,632
ピトラガール	35,697	56,094	69,605	0	0	0
バゲシュワル	5,772	7,803	9,079	0	0	0
アルモラ	47,735	54,505	62,314	0	0	5,166
チャンパワット	26,098	33,778	38,343	6,572	8,179	7,990
ナイニータール	190,989	269,050	371,734	0	0	43,425
ウダム・シン・ナガール	292,293	403,014	573,063	22,072	36,043	69,840
州全体	1,579,295	2,184,849	3,026,203	47,176	137,194	488,934

資料：Census of India 2011 により作成。

パウリ・ガリワール県、チャンパワット県では都市人口に占める比率は依然高い。中でも、デヘラードゥーン県に隣接するテーリ・ガリワール県とパウリ・ガリワール県ではそれぞれ都市人口の25.7%と23.3%を占めるようになり、2001年より大きく上昇している。

以上から、センサス・タウン人口が多くみられた平原地域の諸県では都市人口に占める比率は1991年時点では必ずしも高くはなかったものの、2001年以降は上昇傾向にある。一方、山岳地域の諸県は都市人口に占める比率は相対的に大きいですが、センサス・タウン人口の増加は顕著ではない。

## 2 センサス・タウンの立地特性

センサス・タウンは既存都市の都市化の影響を受けて出現していると考えられる。そのため、センサス・タウンの立地を都市および最寄りの鉄道駅との近接性の観点から考察する。当州は起伏の大きな山岳地域である点を考えると、近接性を2地点間の直線距離で計るのは適切ではない。そこで、本稿はセンサス・タウンと主要都市および最寄り鉄道駅との道路距離を使用した。なお、近接性の評価の基準は下記のように定義した。車で時速60kmで走行すると仮定し、10万人以上の都市からの道路距離については30分以内(30km以内)を近接したセンサス・タウンとする。一方、郡の中心都市(郡の本部所在地)および最寄り鉄道駅は規模が相対的小さいため、15km以内のセンサス・タウンを当該都市および最寄り駅に近いタウンとした。

第5表はウッタラーカンド州のセンサス・タウンを主要都市および鉄道駅からの道路距離帯別集計したものである。ここではセンサスデータにおける1級都市を主要都市としている。1級都市は50万人以上の都市と10万人以上の都市の2つに区分されている。ウッタラーカンド州には、50万人以上の都市がデヘラードゥーンしか存在しない(第4図)。ただし、ここでは近隣州の50万人以上の都市であるウッタール・プラデーシュ州北部のパレーリーとムラーダーバードを含めて検討した。上記3都市のいずれかから30km以内にあるセンサス・タウンは5タウンのみであり、

しかも全てがデヘラードゥーンからの30km圏内に含まれるものであった。30km以遠に立地している36タウンのうち、平原地域のデヘラードゥーン県、ハルドワール県、ウダム・シン・ナガール県とナイニータール県にあるのは30タウンと多数を占める。

続いて、10万人以上都市との近接性をみると、当州の10万人以上の都市は、デヘラードゥーン、ハルドワール、ハルドワーニーの3都市のみであるが、これにウッタール・プラデーシュのムラーダーバードを加えて検討した<sup>3)</sup>。これら4都市との道路距離が15km内のセンサス・タウンは12タウンであり、15~30km内には7タウンが認められた。その中で、ハルドワールに近接しているのは10タウンと多く、デヘラードゥーンとハルドワーニーに近接しているのはそれぞれ5タウンと4タウンである。ハルドワールはガルワール地方で最も重要な工業都市であり、その発展は県内のセンサス・タウンだけでなく、デヘラードゥーン県南東部のリシュケーシュ郡におけるセンサス・タウンの成立にも影響を及ぼしている。州都のデヘラードゥーンとナイニータール県のハルドワーニーは商業が発達しており、県内のセンサス・タウンの成立に与える影響が大きい。一方、主要都市から30km以遠に立地しているセンサス・タウンは22タウンである。ナイニータール県を除く山岳地域には6タウンのみしか存在せず、残りの16タウンは平原地域のハルドワール県とウダム・シン・ナガール県の2県に分布している。その中で、ハルドワール県のセンサス・タウンは南部のルールキー郡に集中し、ウダム・シン・ナガール県の場合はハルドワーニーからの道路距離が離れる県の東部から西部まで分散している。

次に、郡の中心都市および最寄りの鉄道駅とセンサス・タウンとの道路距離との関係を考察する。郡の中心都市とセンサス・タウンの道路距離をみると、15km圏内のセンサス・タウンは41のうち36と多い。近隣に3つ以上のセンサス・タウンを有するのはデヘラードゥーン郡、リシュケーシュ郡、ハルドワール郡、ルールキー郡、ハルドワーニー郡である。その中で、ハルドワール県南部のルールキー郡は最も多い

第5表 センサス・タウンと主要都市および鉄道駅との道路距離

	15km 以下	15-30km	30-50km	50-100km	100-200km	200km 以上
50万人以上都市	4 ( 4)	1 ( 1)	5 ( 5)	26 (24)	5 ( 1)	
10万人以上都市	12 (12)	7 ( 7)	14 (13)	7 ( 3)	1	0
郡の中心都市	36 (32)	5 ( 3)	0	0	0	0
最寄り鉄道駅	35 (31)	2 ( 2)	2 ( 2)	1	1	0

注：( ) 内の数字は州都および平原地域のセンサス・タウン数である。

資料：Census of India 2011 により作成。



12 タウンを有している。ルールキー郡は農業が発達しているが、教育、製造業、観光業の成長もみられ、これにより人口の流入が進み、センサス・タウンの新設をもたらしたと考えられる。ウダム・シン・ナガール県のセンサス・タウンは県西部のカシプール郡、中部のキッチャ郡、東部のカチマ郡に分布している。上記の3郡はいずれもウッタラーカンド州産業開発公社（SIDCUL）によって工業団地が造成されている。また、農業および関連産業も発達しているため、県内外からの労働力流入が進み、センサス・タウンの新設をもたらしたと考えられる。その他、工業団地が設立されたパウリ・ガリワール県のコダワラ郡も近隣に複数のセンサス・タウンを有している。

一方、最寄りの鉄道駅からの道路距離が15km内のセンサス・タウンは41タウンのうち35タウンある。これは当州のセンサス・タウンと鉄道駅がともに平原地域に集中していることと関係している。中でも、ルールキー駅、リシュケーシュ駅、デヘラードゥーン駅とハルドワーニー駅の近隣に所在するセンサス・タウンは25タウンと多数を占める。最寄り駅から15km以上離れているのは、主にデヘラードゥーン県西部のピカス・ナガル郡、アルモラ県のアルモラ郡、チャンパーワット県のピルナギリ郡、ウダム・シン・ナガール県のキッチャ郡のセンサス・タウンである。

以上から、当州のセンサス・タウンは必ずしも50万人以上都市に近接しているとはいえない。10万以上都市に近接しているセンサス・タウンもおおよそ半数程度である。上記の分布特性は主に当州のセンサス・タウンが平原地域の3県およびナイニータール県に分散して立地していることによる。一方、センサス・タウンの大多数は郡の中心都市や鉄道駅の15km圏内にあり、それらへのアクセスはその成立において重要な要素になっていることを示唆する。

### 3 人口移動の特性

ウッタラーカンド州の都市化は、主に平原地域の諸県を中心に進んでいる。その進展は主に州内外からの人口流入による。そのため、本節では2011年のセンサス・タウン人口が1万人以上の6県を対象に、人口移動の地域特性を考察する（第6表）。まず、転入人口の多いガルワール地方平原地域のハルドワール県とデヘラードゥーン県をみる。ハルドワール県では州外の農村部から最も多くの人口流入がみられた。流入人口の多くは近隣のウツタル・プラデーシュ州であった。次いで、県内の農村部からの流入があり、州外の都市部からの流入も少なからずみられた。主な流出元

はウッタラーカンド州の農村部と近隣のウツタル・プラデーシュ州の都市部であった。一方、デヘラードゥーン県で最も多かったのは県外の農村部からの流入であり、転出元は同じくガルワール地方にあるパウリ・ガリワール県とテーリ・ガリワール県であった（第5図）。続いて多かったのは州外の都市部と農村部からの移動であり、近隣のウツタル・プラデーシュ州からの移動が多く認められた。

続いて、クマーウーン地方で転入人口の多いウダム・シン・ナガール県とナイニータール県の状況を検討する。ウダム・シン・ナガール県への流入人口の多い地域は、州外の農村部、県内の農村部、州外の都市部の順である。一方、ナイニータール県は県外の農村部、県内の農村部、州外の農村部の順であった。ウダム・シン・ナガール県と比較して、ナイニータール県は州内農村部からの移動が相対的に多いことが読み取れる。県外の転出元をみると、ナイニータール県は近隣のアルモラ県が最も多く、北部にあるピトラガール県とハゲシュワール県が続く。一方、ウダム・シン・ナガール県は州外の農村部から多くの人口流入がみられた。それは下記の2つの要因によると考えられる。1つはウダム・シン・ナガール県に州最大の工業団地が設けられ、州外からも多くの労働力を引きつけられることである。いま1つは、ウダム・シン・ナガール県がウツタル・プラデーシュ州の北部に近隣し、交通条件も相対的に便利であるため、近隣州からの就業による移動を促したためである。

最後に、転入人口が相対的に少ないガリワール地方にあるテーリ・ガリワール県とパウリ・ガリワール県の状況を分析する。上記2県は平原地域や、ナイニータール県と異なり、県内の農村部からの移動が圧倒的に多いことが特徴である。その他、県外の農村部と州外の農村部からの移動も一部みられたが、県外の転出元は近隣県にとどまっている。テーリ・ガリワール県はパウリ・ガリワール県とデヘラードゥーン県が主な転出元であり、それぞれ8,584人と8,156人の流入がある。一方、パウリ・ガリワール県はテーリ・ガリワール県からの転入人口が8,405人と突出して大きい。

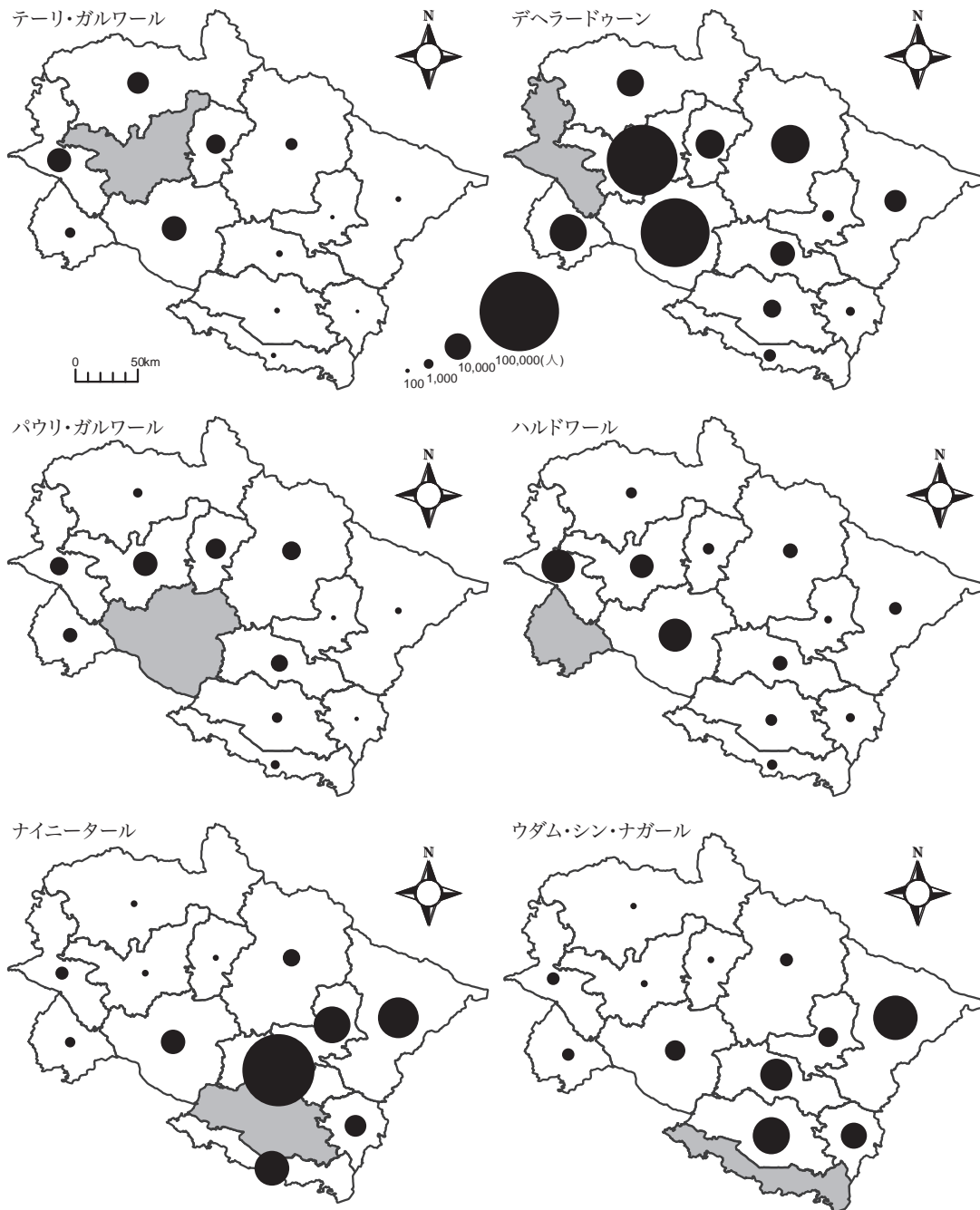
以上から、当州の平原地域にある3県およびナイニータール県は経済発展に伴い州内外から多くの人口が流入している。この人口増加は都市化の進展およびセンサス・タウンの増加を促したと考えられる。一方、山岳地域の諸県は経済発展が遅れているため、県内の農村部から都市への移動がメインで、センサス・タウンがその受け皿となっている。

第6表 センサス・タウン人口1万人以上の県における転入人口の特性

(単位：人，%)

県名	計	前住地					
		州内				州外	
		県内		県外		農村部	都市部
		農村部	都市部	農村部	都市部		
テーリ・ガルワール	86,515(100)	53,354(61.7)	5,268( 6.1)	9,853(11.4)	6,314(7.3)	7,151( 8.3)	4,575( 5.3)
デヘラドゥーン	351,679(100)	63,149(18.0)	42,341(12.0)	73,637(20.9)	29,051(8.3)	71,206(20.2)	72,295(20.6)
パウリ・ガルワール	106,997(100)	64,461(60.2)	7,178( 6.7)	10,799(10.1)	6,275(5.9)	9,121( 8.5)	9,163( 8.6)
ハルドワール	251,258(100)	64,474(25.7)	21,327( 8.5)	17,665( 7.0)	10,083(4.0)	87,478(34.8)	50,231(20.0)
ナイニータール	171,626(100)	43,774(25.5)	16,373( 9.5)	46,753(27.2)	14,781(8.6)	26,864(15.7)	23,081(13.4)
ウダム・シン・ナガール	247,736(100)	48,478(19.6)	23,764( 9.6)	23,567( 9.5)	12,656(5.1)	98,156(39.6)	41,115(16.6)

資料：Census of India 2011 により作成。



第5図 ウッタラーカンド州における主要県別の県外転入人口数

資料：Census of India 2011 により作成。

## V おわりに

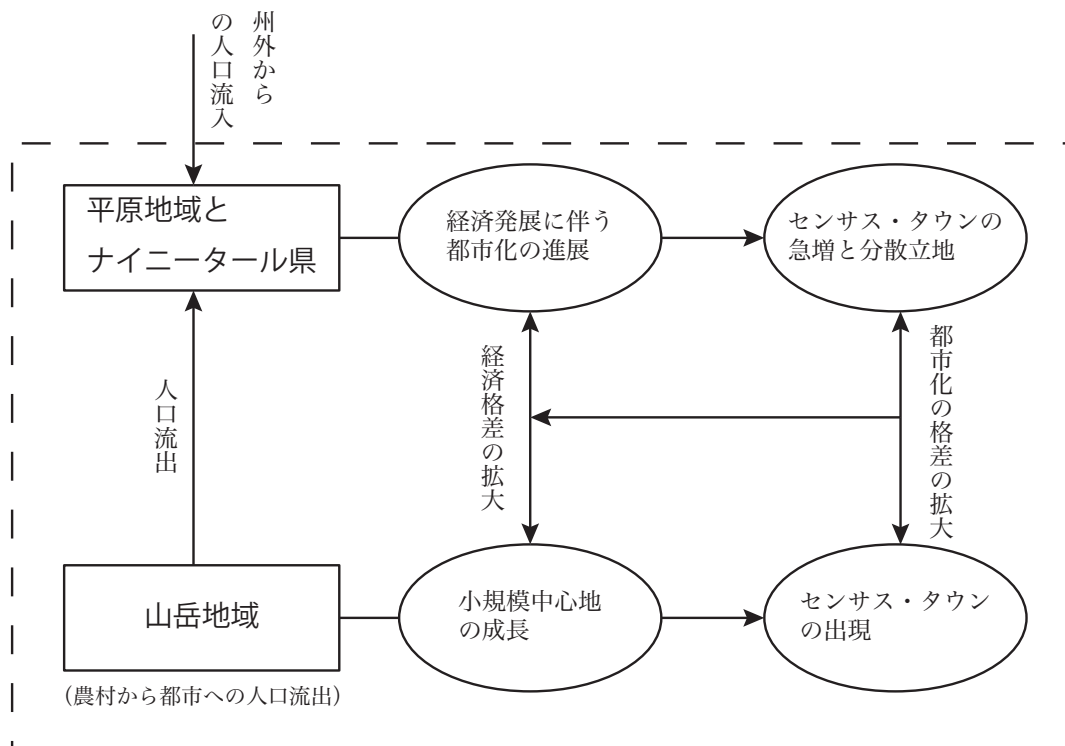
本稿はインドのヒマラヤ山岳地域に位置しながら、デリー首都圏の経済成長の恩恵を受けているウッタラーカンド州を取り上げ、当州における都市化の進展がセンサス・タウンの成立に果たす役割を考察した。当州の都市化は1991年の本格的経済自由化以前には緩やかであったが、それ以降都市人口および都市数が急増し始めた。これによって、2011年には当州の都市化率はインド平均の水準に近い30%に達した。また、都市化の進展に伴い、当州ではセンサス・タウンも増加している。しかし、都市人口に占めるセンサス・タウン人口は2011年時点で依然として16%に留まり、インドの全国比率29.5%よりは低水準にとどまっている。

当州の都市化の進展には地域間のばらつきが大きい(第6図)。都市人口の急増がみられたのは主に平原地域の3県およびナイニータル県である。そのため、都市人口比率の高い県も上記の県となっている。一方、ナイニータル県を除く山岳地域の諸県は、近年都市人口の増加がみられるものの、都市人口の比率は依然として低い水準にとどまっている。また、県別の人口移動を確認すると、平原地域の3県およびナイニータル県では州内外から多くの人口流入がみられた。山岳地域の諸県は人口の転入が少なく、基本的に県内

の移動が中心となっていることが判明した。これにより、都市化を通じた平原地域と山岳地域の経済格差も今後さらに広がっていくと予想される。

都市化の進展に伴うセンサス・タウン人口の増加にも地域ごとのばらつきが大きいことが判明した(第6図)。都市化の進んでいる平原地域、特にガルワール地方の平原地域ではセンサス・タウン人口の増加が顕著であるが、山岳地域の諸県では乏しい。平原地域の諸県では都市人口に占めるセンサス・タウンの比率が必ずしも高くないが、近年上昇傾向にある。一方、山岳地域の諸県は主要都市が存在しないため、都市人口に占めるセンサス・タウン人口の割合は相対的に大きい。また、当州のセンサス・タウンは主に平原地域の3県およびナイニータル県に分散的に立地している。そのため、その成立は50万人以上の州都や1級都市への近接性よりも、郡の中心都市、鉄道駅へのアクセスがより重要な要因になっていることが明らかとなった。一方、山岳地域におけるセンサス・タウンの増加はこの地域における小規模中心地の形成も進んでいることを示唆している。

本稿はセンサスデータなどの二次統計資料に基づき、ウッタラーカンド州における都市化の進展がセンサス・タウンの成立に果たす役割を検討した。しかし、センサス・タウンの変動を捉えるには雇用構造の変化



第6図 ウッタラーカンド州における都市化の進展とセンサス・タウンの成立

資料：著者作成。

や都市からの波及効果など多方面からの分析が重要である。また、現地調査に基づくセンサス・タウンに関する詳細な分析も必要であり、これらは今後の課題としたい。

## 付記

本稿は、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「南アジア地域研究」、および JSPS 科研費 JP19H01384 による研究成果の一部です。

## 注

- 1) 1 級都市は 10 万人～50 万人の都市を指す(Pradhan, 2013)。
- 2) 小都市は 1 万人～10 万人の人口を有する地域とされた。
- 3) クマールウーン地方のセンサス・タウンはウツタル・プラデーシュ州のバレーリーと比較して当州のハルドワールに近接しているため、この分析はバレーリーを含めないことにした。

## 参考文献

- 宇佐美好文・岡本勝男 (2015): 拡大する溶融空間. 水島 司・柳澤 悠編:『現代インド2 溶融する都市・農村』東京大学出版会, 127-154.
- 宇根義己・岡橋秀典 (2014): ウッタラーカンド州の地域的特性と開発問題. 岡橋秀典編著:『現代インドにおける地方の発展—ウッタラーカンド州の挑戦—』海青社, 15-47.
- 岡橋秀典 (2012): 現代インドの空間構造と地域発展: メガ・リージョン研究に向けて. 広島大学現代インド研究: 空間と社会, 2, 1-15.
- 岡橋秀典・田中健作・ティワリ P.C. (2011): インドの山岳州における工業化と低開発問題: ウッタラカンド州の事例から. 広島大学現代インド研究: 空間と社会, 1, 27-36.
- 佐藤隆広 (2015): 都市の経済活動—製造業と労働市場の視点から—. 水島 司・柳澤悠編:『現代インド2 溶融する都市・農村』東京大学出版会, 155-183.
- 友澤和夫 (2008): インドの後進州における産業開発戦略と工業立地—ウッタラカンド州の「インダストリアル・ベルト」形成を中心に. 広島大学大学院文学研究科論集, 68, 57-76.
- 日野正輝・宇根義己 (2015): 都市化と都市システム. 岡橋秀典・友澤和夫編:『現代インド4 台頭する新経済空間』東京大学出版会, 151-171.
- 由井義通 (2003): インドにおける大都市開発. 地誌研年報, 12, 105-130.
- Bell, D. and Jayne, M. (2009): Small Cities? Towards a Research Agenda. *International Journal of Urban and*

- Regional Research*, 33(3), 683-699. doi:10.1111/j.1468-2427.2009.00886.x
- Berdegué, J.A., Carriazo, F., Jara, B., Modrego, F. and Soloaga, I.(2015): Cities, Territories, and Inclusive Growth: Unraveling Urban-Rural Linkages in Chile, Colombia, and Mexico. *World Development*, 73, 56-71. doi:10.1016/j.worlddev.2014.12.013
- Chauhuri, B., Chatterjee, B., Mazumdar, M. and Karim, S.(2017): Income Ranking of Indian States and Their Pattern of Urbanisation. Denis, E. and Zerah, M.-H. eds.:*Subaltern Urbanisation in India*. Springer, New Delhi, 91-118.
- Christiaensen, L. and Todo, Y.(2014): Poverty Reduction during the Rural-urban Transformation : The Role of the Missing Middle. *World Development*, 63, 43-58. doi:10.1016/j.worlddev.2013.10.002
- Denis, E. and Ahmad, Z.(2017): On Global and Multiple Linkages in the Making of an Ordinary Place: Parangipettai-Porto Novo. Denis, E. and Zerah, M.-H. eds.:*Subaltern Urbanisation in India*. Springer, New Delhi, 167-195.
- Denis, E., Mukhopadhyay, P. and Zerah, M.H.(2012): Subaltern Urbanisation in India. *Economic & Political Weekly*, 47(30), 52-62.
- Denis, E. and Zerah, M.-H.eds.(2017): *Subaltern Urbanisation in India*. Springer, New Delhi.
- Pradhan, K.C.(2013) : Unacknowledged Urbanisation: The New Census Towns of India Unacknowledged Urbanisation New Census Towns of India Definition of Census Towns. *Economic & Political Weekly*, xlvi, 43-51.
- Punia, M., Kumar, R., Singh, L. and Kaushik, S.(2017): Comparison of Peripheral Metropolitanisation in Haryana and Rajasthan, India. Denis, E. and Zerah, M.-H. eds.: *Subaltern Urbanisation in India*. Springer, New Delhi, 141-165.
- Swerts, E.(2017): The Substantial Share of Small Towns in India's System of Cities. Denis, E. and Zerah, M.-H. eds.: *Subaltern Urbanisation in India*. Springer, New Delhi, 67-89.
- Zhu, Y.(2000): In Situ Urbanization in Rural China: Case Studies from Fujian Province. *Development and Change*, 31, 413-434. doi:10.1111/1467-7660.00160
- Zhu, Y.(2002): Beyond Large-city-centred Urbanisation: In Situ Transformation of Rural Areas in Fujian Province. *Asia Pacific Viewpoint*, 43, 9-22. doi:10.1111/1467-8373.00155

(2019 年 11 月 13 日受付)

(2020 年 1 月 31 日受理)

## **Growth of Census Town and Its Spatial Characteristics in Uttarakhand State of India**

**Lin CHEN\***, **Yutaro KATSUMATA\*\*** and **Guandong SU\*\***

\*The Center for Contemporary India Studies, Hiroshima University; National Institutes for the Humanities (NIHU)

\*\*Graduate Student, Graduate School of Letters, Hiroshima University

**Key words:** Census Town, urbanization, spatial characteristics, spatial disparity, Uttarakhand State, India

In recent years, Census Town has become an important part of India's urbanization. This study aims to explore the role of urbanization in the growth of Census Towns in the state of Uttarakhand, which is one of the peripheral states benefiting from the economic growth of the Delhi metropolitan area. The state has basically experienced a slow level of urbanization, but this trend has progressed since the economic liberalization that was implemented in 1991. The rapid increase in urban population was mainly witnessed in three plain districts and the Nainital district, and the ratio of urban population was also higher compared to that of other districts. In contrast, although the urban population has been increasing, the ratio of urban population in the districts of mountainous regions remains low.

It was also found that the population of Census Towns increased with the progress of urbanization, and there were great variations among regions in the state of Uttarakhand. The population of Census Towns is increasing remarkably in the highly urbanized plain districts but remains scarce in the mountainous districts, except the Nainital district. The ratio of Census Town population to urban population is not necessarily high in the plain districts but has been increasing in recent years. On the one hand, mountainous regions do not have major cities, so the ratio of Census Town population to urban population is relatively high. Moreover, the increase of Census Towns in the state shows a decentralized location in the three plain districts and the Nainital district. Therefore, it became clear that access to local central cities and railway stations was a more important factor than the proximity to state capitals and first class cities with more than 100,000 people. On the other hand, the increase of Census Town population in mountainous regions suggests that the formation of small-scale centers in this area is also progressing.